

## 本日、お話ししたいこと

1. 自己紹介と問題意識
  2. 文科省「インターンシップの推進等に関する調査  
研究協力者会議」での議論から
  3. 海外のインターンシップの現状
  4. 産学協働の新たなかたち
  5. まとめ
- 産学協働教育で何をすべきか、そして課題は—

許され・求められ・認めてもらえる枠

学校(学生)の枠

社会(人)の枠

# 能力・知識の枠

社会(人)の枠

学校(学生)の枠

# 予定調和的なプログラムの危うさ

## 学習機会になっていないのに、有意義な経験をしたと錯覚している（学生も教員も）

- ・異なる価値観を持った人との出会い⇒実は同質な人間。社会人との会話量を圧倒的に増やす。
- ・自分で考え、実行した⇒共同作業の一つのパーツで自分で意思決定しているわけではない  
過去的事例を活用すれば対応可能なパッケージ的、マニュアル的な取り組み
- ・「フリ」。書いて満足。振り返りが極めて浅い。発する言葉に対するコミットメントも弱い。
- ・社会においては不十分なレベル(完成度)であるにも関わらず、「出来た」と勘違いし、小さくまとまる

**予定調和的な学習から誤った自己認識を生んでいないか  
地に足がついていない、独りよがりの意識高い系を生んでいないか**



**インターンシップ、PBLにしても、すべては「きっかけ」であり、次に繋げていくことが大事**

それができるのは、学生という同質な存在の中で、唯一異質な存在である大学教職員であり、学生に良質で、戦略的な関わりを持つ必要がある。

**大学の外部人材ではなく、大学の内部人材（教職員）の専門人材としての役割が重要**

# 「メンバーシップ型(入社型)」社会における人材育成



できることからやらせて、できるようになったら、徐々に難しい仕事をやらせる

企業が求める○○力＝階段を上がっていく力

# インターンシップの更なる充実に向けて【概要】

インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議 議論の取りまとめ

## 具体的な推進方策

### ○届出・表彰制度の導入による優れたインターンシッププログラムの普及

※正規の教育課程としてのインターンシップの要素を満たした取組内容の大学等からの届出・公表により、社会に広く発信・アピールの効果、届出のあったプログラムの中からモデルとなり得るプログラムを表彰等

### ○専門人材の育成・配置

※大学等の教職員が企業、経済団体、地域協議会等と連携・協力し、チームとしての体制を整備等

### ○地域におけるインターンシップ推進のための協議会の充実

※協議会同士でプログラムの確認、専門人材の育成など、お互いの取組を高めあう仕組みの整備等

### ○インターンシップ実施に係る負担の軽減

※中小企業のインターンシップに係る支援策・負担軽減策の検討、学生に中小企業の仕事理解を促す支援策の検討、手引書・事例集の作成、評価の際の共通指標の検討等

**一般社団法人**

**産学協働人材育成コンソーシアム**

**Japan Consortium of Industry-academia Collaboration in Human Resource Development**

## Mission

産学協働による人材育成・活用の継続的な推進・発展により、  
一人ひとりが生き生きと学び、活躍できる次世代社会の創造に貢献する

## Value

自分に自信、社会に信頼、将来に希望を持つ人材を育成する  
地域社会の活性化に貢献する人材を育成する  
普遍性の高い学ぶ力（「学びへの志」）を持った人材を育成する

## Output

産学協働による人材育成・活用に関する課題に対し、総論ではなく実践  
を通して、解決に繋がる成果を創出し、社会に還元する



# 産学協働基盤全国ネットワーク

共通する課題であれば  
協働して解決を図った方が効果的、効率的

経済産業省「産学協働インターンシップ等の連携実態調査」(2015年12月実施)

**課題** 「予算・人員確保」「関係者の参画意識」「プログラム改善」  
「参加学生数の拡大」「学生の参加意欲」・・・等

- 地域連携組織間の相互作用・支援・情報交流
- 先進事例・ノウハウ・課題の共有
- コンサルティング、ノウハウ移転
- 俯瞰によるプログラムの位置づけ、内容改善

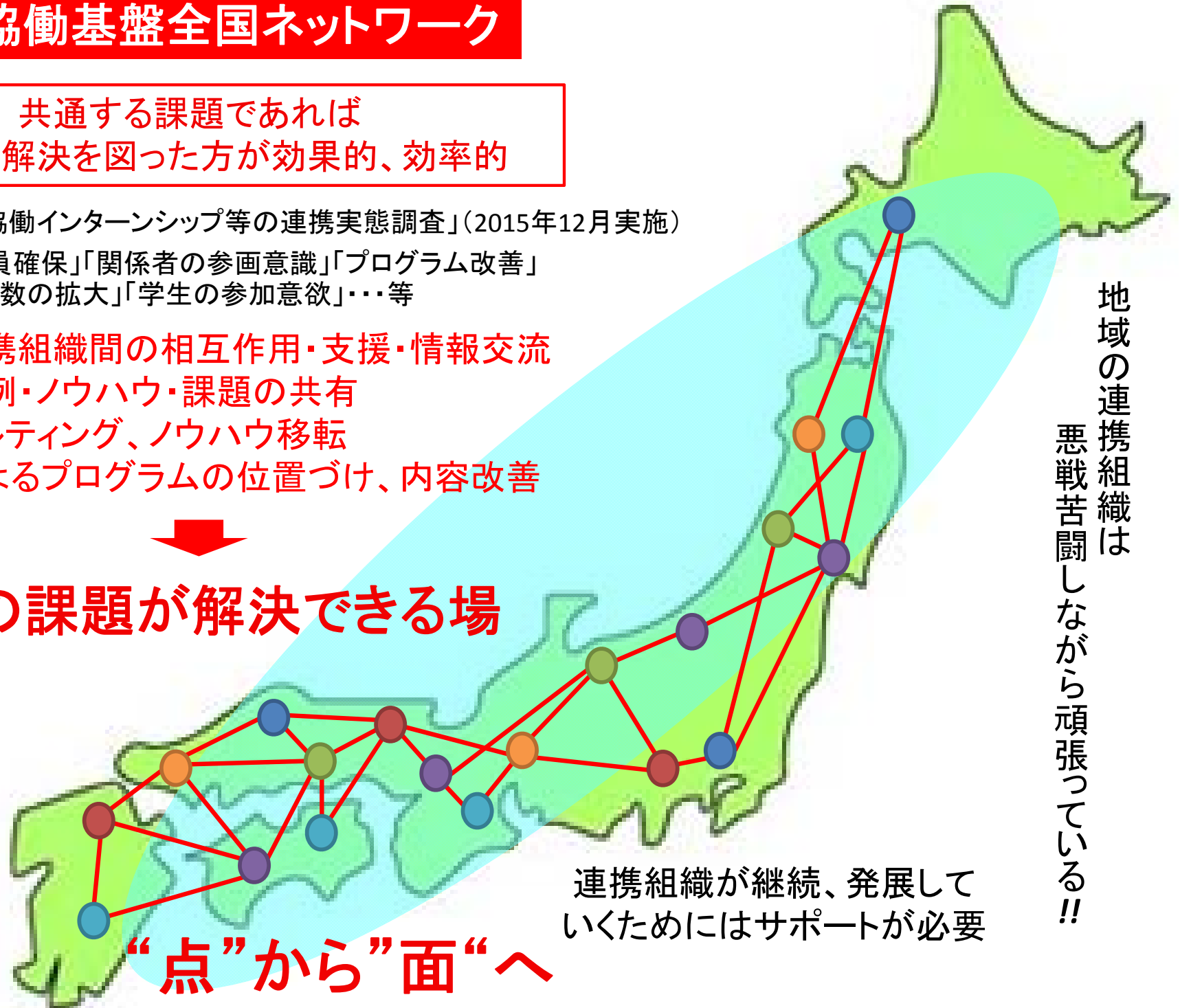


自らの課題が解決できる場

“点”から“面”へ

連携組織が継続、発展していくためにはサポートが必要

地域の連携組織は  
悪戦苦闘しながら頑張っている!!



# これからの産学協働教育に求められること

1. 学生を成長させるだけではダメ。  
企業も地域も成長していく仕組み。
2. 「個社完結型『採用・育成』システムから  
「社会協働型『育成・活用』システム」へ
3. 知恵を出し合い、工夫をし、具体的な事例を  
どれだけ創出し、蓄積、共有できるか
4. お互いに“さらし合い”、本音で、本気で  
首を突っ込み合う

本日はありがとうございました。